

この部屋から、旅に出よう。

Vol.11

Platform

トロス・ペクティフ

昭和

知らないのに、
あの時代の匂いがする。

station

- VRChat : 哲学カフェ 芳紅堂
- cluster : さよならの向こう側
- Resonite: Lost in Japanese summer
- Real.W : オートレストラン

Platform → contents

Vol.11

Gravure: Japan After School4
哲学カフェ 芳紅堂 Japan After School bills kitchen 1950s VRChat12
さよならの向こう側 cluster18
Lost in Japanese summer Resonite24
オートパーラー上尾 後藤商店 自販機オーナーオアシス	Real.W30
あとがき36

第11号のテーマは「60's~70'sレトロ」。

今や「平成レトロ」なんて言葉もあるそうですが、レトロの本場はやはり昭和。今号ではいろいろな「レトロ」の形を切り取りました。二度と戻れない故に美しく、二度と触れられないが故に輝きます。

VR世界は産まれてまだ若いですが、そこに再現された「疑似過去」は、あなたにどんな感情を呼び覚まさせるでしょうか？

編集長

世界には、色々な町がある。

その町ひとつひとつに、駅がある。

どの町も駅もそれぞれ違っていて、
違った人たちがいて、
そこを訪れた僕たちが抱く思いも、
きっと違うのだろう。
.....VRでも、Real Worldでも。

今はまだ離れ離れの「駅」を、「町」を、
あなたへ繋ぐ線路でありたい。

——それが「Platform」

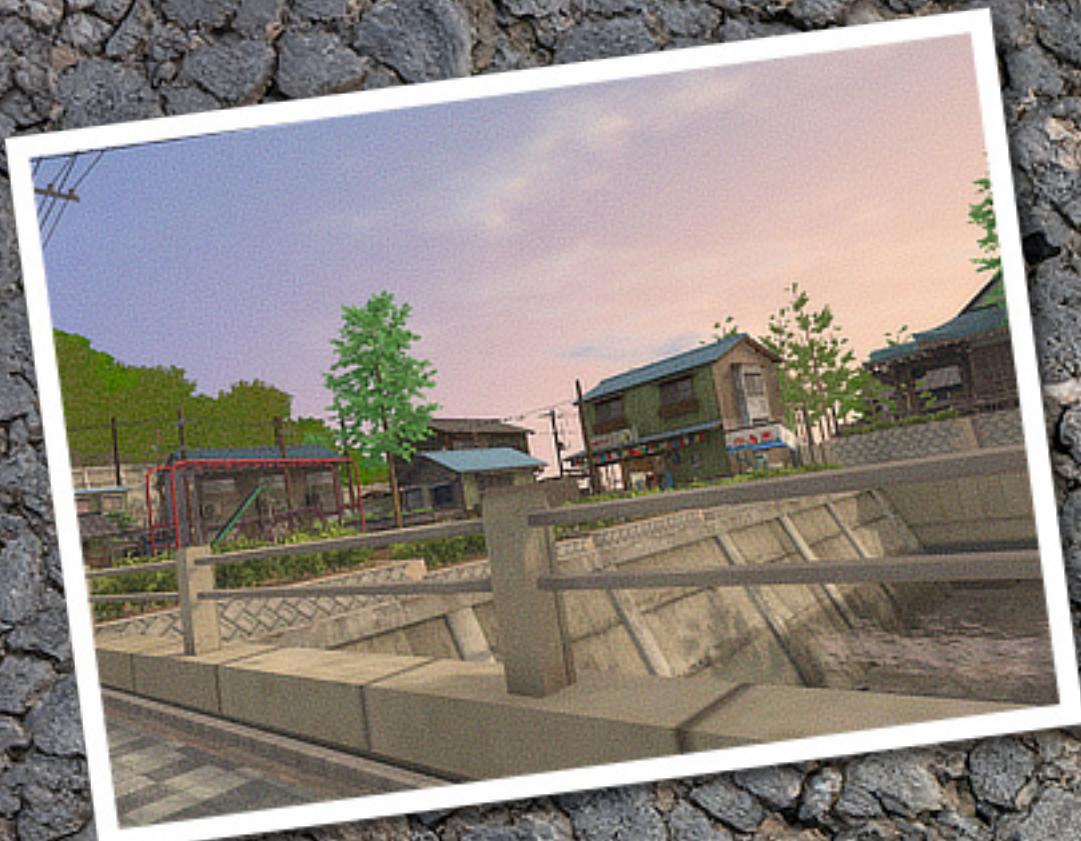


四季を彩る

昭和の校舎



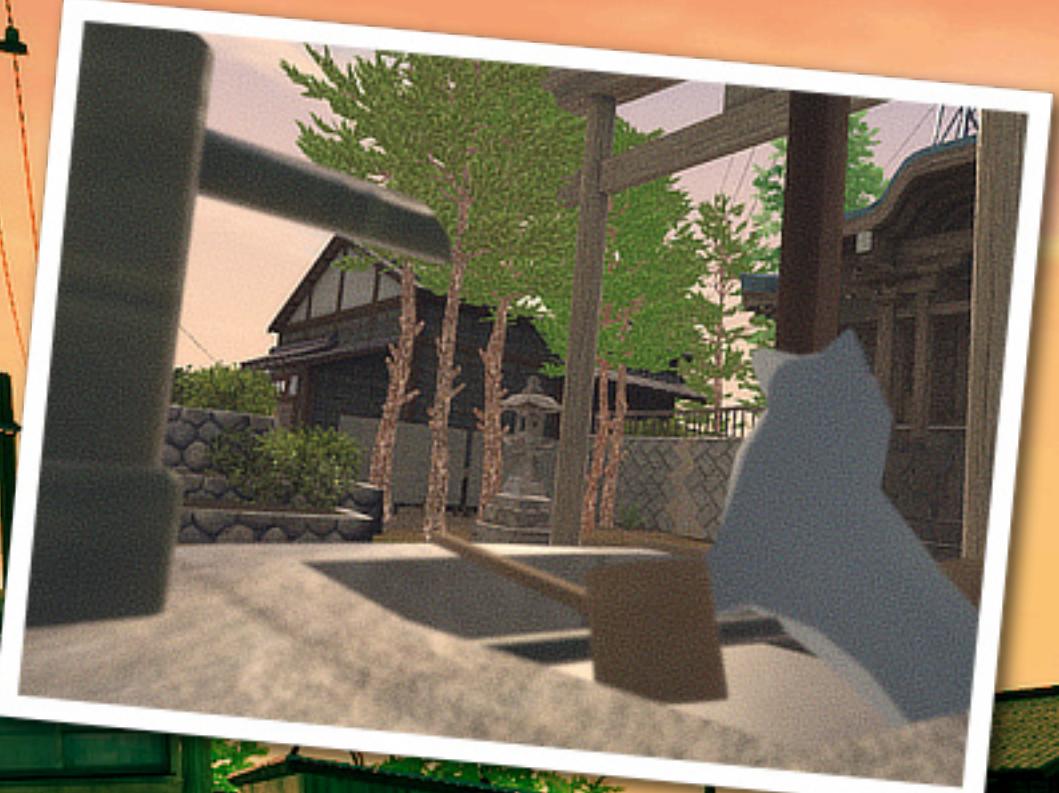
いつも通った



かえりみち

どこかで感じる

懐かしい記憶



あの頃の夕日



World: JapanAfter School

Created by WAPAN

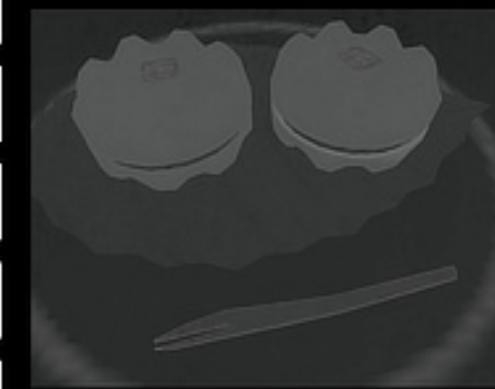
哲學かふえ

芳紅堂

今、貴方が捲ったこのページは鮮烈な色彩を放っているだろうか。貴方がもしギラギラと光るそのクオリアに触れているのであれば、一秒でも長くその記憶を留めておいてくれないか。このページの写真も文章も私たちの前では既に冷や麦のように温度を失って変質してしまっている。私たちはもうあの頃と同じクオリアを感じできないんだ。

——「現代」の私より

写真/neirow



「昭和」とは何か？
関連するワールドを巡り、
その謎を紐解いてみよう。



昭和レトロ 哲学紀行

遠くに潮騒の音が聴こえる。ゼンマイ式の振り子時計がメトロノームのようにコチコチと音を立てて、蓄音機から流れる籠つた音質の歌謡曲の音頭をとっている。ここは「哲学カフェ 芳紅堂」。訪れた人たちと哲学対話を楽しむことができる特異なカフェだ。

ついさっきまで私は一人木製の椅子に腰掛け、電球に照らされた入口の立て看板をぼんやり眺めていた。このページを捲った貴方と哲学対話がしたくて待っていたんだ。テーマは今号を冠する「昭和レトロ」、これは一体何なのか？なんてどうだろう。ああ、でもその前に、そうだけれども、「大正ロマン」かもしれない。だけどこにある振り子時計や蓄音機や木製の椅

の帰り道を模したワールドだ。木造の校舎やトタンを貼った家々、寂れた駄菓子屋、野暮つたい定食屋。これは何となく「昭和レトロ」を感じないかい。三輪スクーターなんかも、ああ、昭和だなって私は感じる。……なんだか『人間失格』の悲劇・喜劇名詞みたいになってきたね。

「大正ロマン」かもしれない。だけどこにある振り子時計や蓄音機や木製の椅

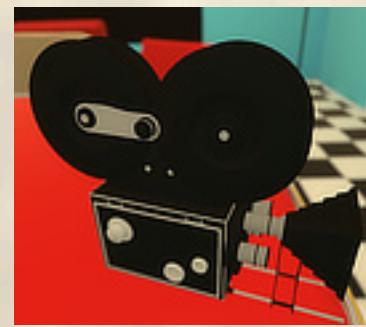
子はきっと昭和の時代にも普通に使われていたと思うけど、どうだろう。いや、わかるよ、それは言つても「大正ロマン」と「昭和レトロ」は何かが違う。じゃあ例えば、このワールドはどうだろう、今ポータルを開くね。

ここは「Japan After School」、放課後の帰り道を模したワールドだ。木造の校舎やトタンを貼った家々、寂れた駄菓子屋、野暮つたい定食屋。これは何となく「昭和レトロ」を感じないかい。三輪スクーターなんかも、ああ、昭和だなって私は感じる。……なんだか『人間失格』の悲劇・喜劇名詞みたいになってきたね。

寂れた駄菓子屋や三輪スクーターは昭和名詞、大衆食堂は……うーん一応昭和名



ブラウン管のテレビ



フィルムのカメラ



レトロアメリカン キッチン

1950年代のアメリカの
彩りのあるキッチン。

Bill's Kitchen 1950s

By billly

[ACCESS](#)

して感じる差異、そしてそれは型が古いたとかチープだとかそんな機能的な差異ではなく、「昭和」と「現代」の時間的な距離によって生じる、あるモノについて「まだ息づいている」と感じたり「もう息づいていない」と感じたりする印象の差異のことなんだ。私たちは今を生きているから過去には戻れない。その絶対的な時間の不可逆性を前に浮かべる諦念や後悔や憧憬によって「昭和」のクオリティは一層浮き彫りになるんじゃないかな。二つ目は「経験の蓄積」。私たちは日々「現代」を経験しているけれど、通常は、ある時代に息づいたものからは順次卒業していくよね。携帯型音楽プレーヤーだって、カセットテープからCDへ、CDからMDへ、MDからハードディスクへ。でも逆に、例えばスマートフォンやパソコンも使わずにずっと「昭和」の生活を続けている人は「昭和レトロ」を明確に感知するだろうか。多分できないだろう。ということは、「現代」にどうぶり浸かっているからこそ、逆からいえば「昭和」を捨ててきた、あるいは捨てる「昭和」さえ未経験だったからこそ、昭和のモノたちに共通するクオリアは総体として形作られ、鮮明になつてい



寂れた駄菓子屋さん



昭和な大衆食堂



昔の子どもたちの かえりみち

昭和の風景を感じさせる街。
大衆食堂や駄菓子屋など、
懐かしい風景を思い起こす。

Japan AfterSchool

By WAPAN

[ACCESS](#)

ビビッドな色が飛び込んでくる。「ここは『bill's kitchen 1950s』」。1950年代のアメリカ風のキッチンを模したワールドだ。ここも一つの「昭和レトロ」としてカウントできそうだと思わないかい、どうだろう。因みに私は……ううん、あまりそう思わない。でもそれは国が違うからだとか馴染みがないからだとかそういうことじゃないんだ。

ちょっとテーブルの上のフィルムカメラを動かしてみて欲しい。カメラを向けた場所がそのブラウン管テレビにモノクロの映像として映し出されるんだ。私はこのブラウン管越しにこのワールド見ることで漸く「昭和レトロ」を感じみたいだ、不思議なことに。一度、カフェに戻ろうか。

ワールドを巡って気付いたのだけれども「昭和レトロ」とは「昭和」という時代に息づいた存在やモノたちについての印象や質感、それらに共通したクオリアとでも呼ぶべきもので、それは二つの触媒によつてもたらされるものなんじやないかなって、私は思うんだ。

一つは「現代との差異」。「昭和」という歴史の一時代に息づいた存在を前に

芳紅堂は定期イベント
ではなく、パブリックで
開放されます。



哲学カフェ 芳紅堂

By ぽこ（芳紅）

昔の学生が入り浸ったレトロな喫茶店をイメージ。知的刺激のある話題を語り合う場となっています。

ACCESS

が付いたんだ。「昭和レトロ」は変遷していく現代と、経験というバイアスの影響を受けて変質していき、最悪いつかは消えてしまうのかもしれない。今日見た風景は明日同じ風景として捉えることはできるのだろうか、なんて。

さて、今日はありがとう、楽しかったよ。それと……いや、やっぱりいいや。またいつか、貴方がページを捲ったその時にでも。

パブリックで開放 知の語り場

芳紅（ほこ）堂はパブリックインスタジアムで開放されており、訪れた人たちと知的刺激のある哲学の話題で語り合える場を提供している。



お話しできるスペースがあり、テーブルを囲んで会話を盛り上げることも。

昔の学生が集まつたレトロな喫茶店をイメージしたワールド。



アンティーク調のある、落ち着いた喫茶店。

くんじやないかな。ああ、えっと、つまり、ある時代に息づいたモノたちとどう関わりを持ってきたのか、その関わりの厚みや継続性の度合い、あるいは欠如の度合いに応じて、そのモノたちが共通して持つクオリアが与えられるんじゃないかな、って思うんだ。

そして……思い至って私が少し、怖いなど感じたのがこの二つの触媒の性質。もし私たちが過去に戻れたとして、「昭和」の世を過ごしてみれば「現代」を経験している私たちはきっとその暮らしの中で鮮明な「昭和」における様々なクオリアを感じするのだろう、^{ミ暫くは}。そう、時間的な「現代」も「現代+昭和の時間」として変遷してしまうし、その暮らしを続けていけば昭和の経験が個別のモノたちごとに少しずつ蓄積されていくてしまう。そうすると徐々に「昭和」の総体的なクオリアは減退していかないだろうか。今と過去との隔たりを失うことで全てが「現代」の経験の中に溶け込んでしまうとともに、「昭和」のモノたちと関わりを持つことで、その総体的な印象・質感を語ることが難しくなっていく。私も知らず知らずのうちにブラン管を通してしかあのキッチンの「昭和」を感じ

昔の学生が入り浸つた
レトロな喫茶店

今、海外を中心にシティポップがリバ
イバルしているらしい。竹内まりやの
『プラスティック・ラブ』が発掘された
こと、ヴェイパー・エブが流行している
ことなどから、Japanのanime
やmangaとは異なった「オリエンタ
ル」な雰囲気が受けているそうだ。まあ、
このあたりの知識はうろ覚えだし、正し
かったとしても、シティポップの解説本
に書いてあつたことの受け売りであるの
だが。

1970年代から80年代というのは
実に魅力的な時期だと思う。ちょうど昭
和が終わりに近づき、オイルショックで
景気が悪くなつたとはいえ、日々新しい
モノが発売され、日進月歩で性能が良く
なつていく。うん、人類はこれからもガ
ンガン成長していくんだ、とあのそびえ
たつ太陽の塔が語りかけてきていた。
「人類の進歩と調和」。1970年の大
阪万博は確かに輝く未来を見ていた。

TOKYOでは政治の季節を通り過ぎ
た若者たちが消費社会の最先端を走ろう
とし、80年代になるとそれが加速する。
どうだい、西部百貨店にはデカデカと
「不思議、大好き」「おいしい生活」な

んで聞いたこともないキヤツチコピーが
掲載されて、オレの車のカーステレオか
らは山下達郎やらザンオールスターズ
のイカした曲が流れているし、どうだ
い？今流してある荒井由実の曲にあわせ
て、オレたちもこのまま中央フリーウ
エイをドライブしないか？

今や日本中がサイコーに盛り上が
つててさ！次々に新しいものがで
てきてさ！右肩上がりでさ！

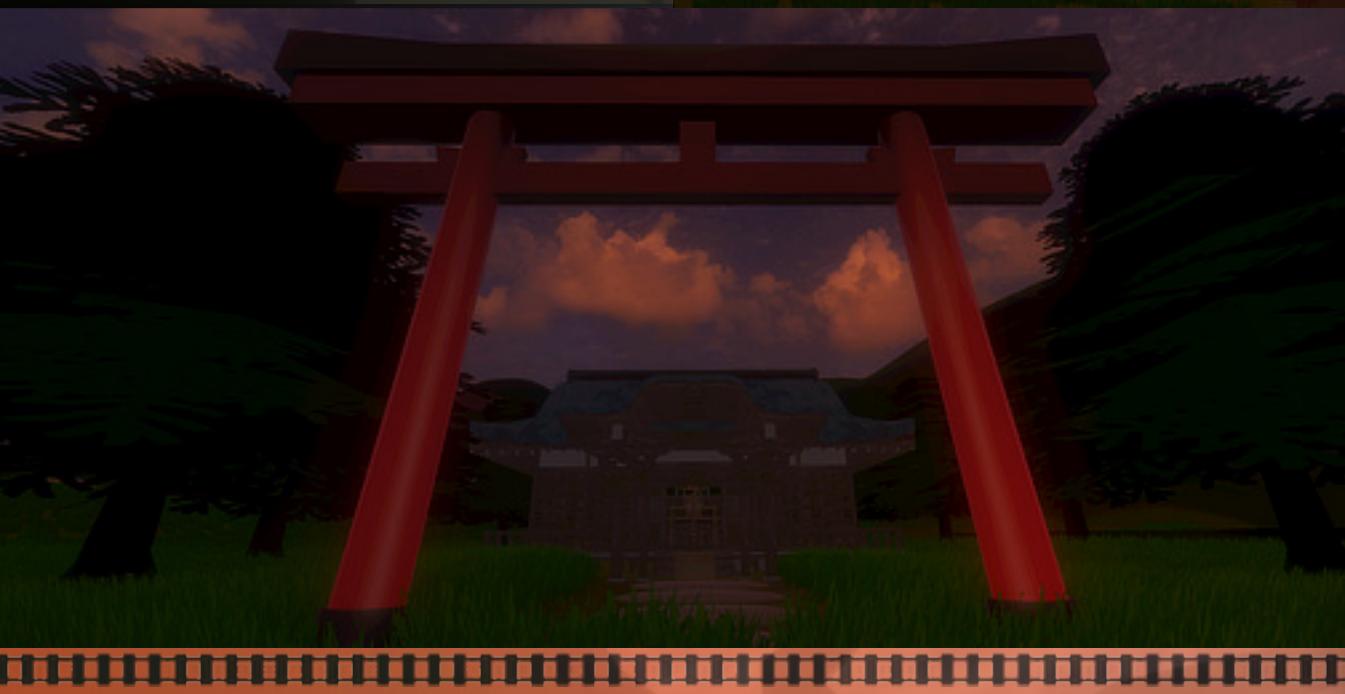
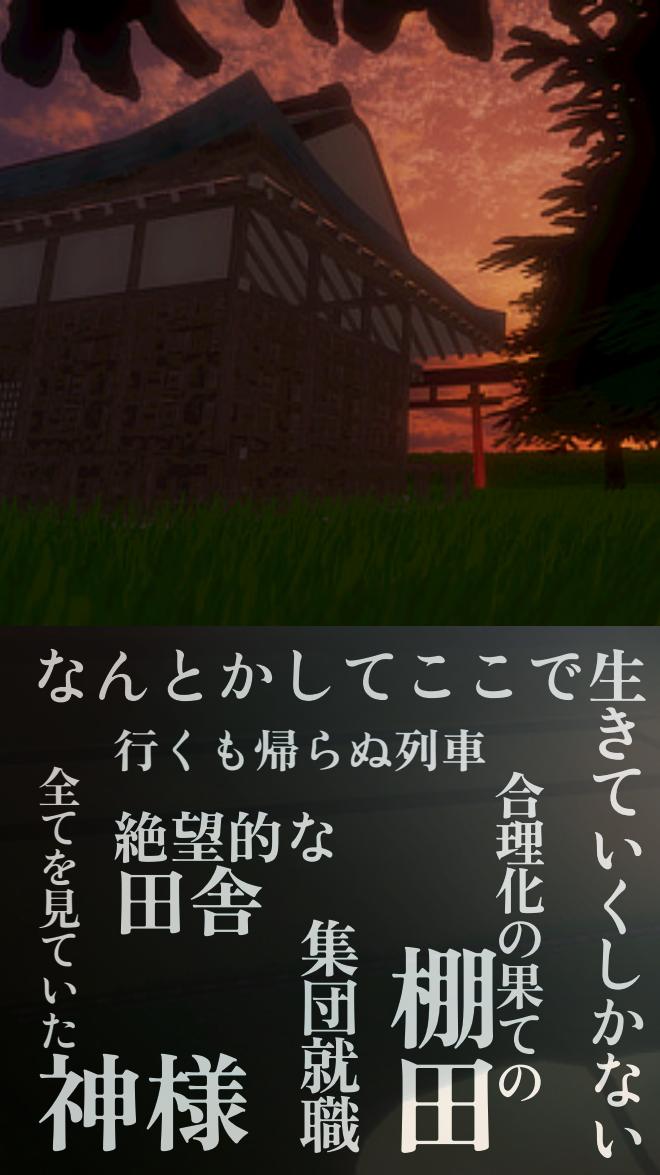
これから日本はまだまだよくな
るはずなんだよ！日本全土が
明るいんだよなあ！！

80年代はともかく、70年代の日本
は、まだまだ敗戦直後、いや、戦前から
連綿と続く呑みが日本中に残されていた
時代でもあったのだ。多分、大部分の人
が教科書で読んだことのある集団就職。
田舎から東京に向かって中卒者が送られ
るアレだ。集団就職列車の最終便は、確
か1973年だったはずだ。未来を見据
えて屹立する太陽の塔の下に月の石がや
ってきた、そんな未来を感じさせた大阪
万博の3年後まで、中卒者が労働力とし
て地方から都会へ送り出されていたのだ。
まだまだ田舎は田舎のままで、そこには
「日本の原風景」だの「エモい」だのと
いう安易な感傷を拒絶するような、絶望
的な「田舎」が存在していたのだ。例え
ば、VR上に再現されている、この棚田
のワールドのように。

個人的な所感であり、学術的な理解と

とりのこされた場所で

文・ニッソ編集長



そんな悲壮感を勝手に覚えててしまうこのワールドを歩いていると、小さな神社が見えてくる。これだけ小さな神社ならば、多分村の中ずっと信仰されてきた神様が祀られているのだろう。明治末期から大正初期の神社整理事業を生き残り、自然災害を乗り越え、この棚田からも米がとれず、大根をかじりながら餓死していった子どもを見つめ、光る敵機が落とす爆弾の炎から目をそらし、漸くやつてきた平和の中で、中学を卒業した若者が都会へ行く、その背中を押してやった。そんな小さな神様が。

は異なるかもしれないが、「棚田」というのは美しいと同時に非常に貧しい土地であることを強調しているように思える。急傾斜の斜面に作られたものが典型的だが、本来であれば水田耕作に向かない土地に、なんとかへばりついて米を作っているように私には見える。「なんとかしてここで生きていこう」、いや、「なんとかしてここで生きていくしかない」という覚悟と悲壮感から作られた棚田は、生き残り、整備されている時だけは美しく見える。合理化の果てに形成された美しさともいうべきか。



さよならの向こう側

Created by うさだぬ



(文..ニッソ編集長)



どうかこのまま、せめてVRの中では、ここ全てが取り残されませんように。神社の小さな神様に祈った。



このワールドの空はオレンジ色だ。多分夕焼けだろう。若者がTOKYOに向かい、取り残された父母亲たちが老いていき、あの神社に訪れる人もいなくなる。あの土地にへばりついていた生の営みが夜の闇に消えてゆく。その最後の一瞬を切り取ったワールドがここなのだと、制作者の気持ちも知らず考へている。

今リバイバルしている、シティropolisをはじめとした70's-80'sブームは、都会のムードメントを切り取つたものだ。別にそれはそれでかまわない。私だってそういうのは大好きだ。

だからこそ、70's-80'sブームと同じくらい、棚田が眼前に広がる場所にも思いを馳せたい。とりわけ、ブルームから取り残され、夜の闇に沈み、ブームの輝きすら終わってしまって、もう雑草だらけになつた棚田がある田舎のような、取り残されてしまった場所があることに。そして、いつか我々が住む都會が、あるいはVR内の人気ワールドが、そうやって終わりを迎えてしまうかもしれないことを考えたい。

最後にもう一度だけ一番高いところにいって、このワールドの全貌を見る。棚田に赤い空の色が反射する。電車が遠くを走る。

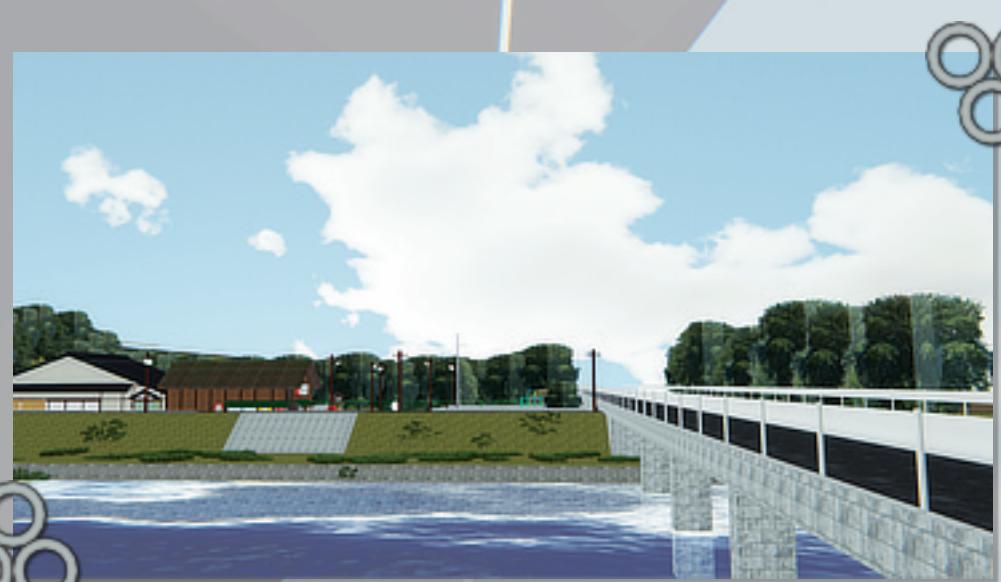
神社から線路が見える。この線路をつたって、若者たちが都會へでていく。彼らはきらびやかな都會に根を下ろすだろう。帰つて来るのも盆と正月だけで、いや、70年代から80年代は24時間戦えますかの時代だ。自宅にすら帰れない彼らが親元に帰つてくることはもうないだろう。

このワールドの空はオレンジ色だ。多分夕焼けだろう。若者がTOKYOに向かい、取り残された父母亲たちが老いていき、あの神社に訪れる人もいなくなる。あの土地にへばりついていた生の営みが夜の闇に消えてゆく。その最後の一瞬を切り取つたワールドがここなのだと、制作者の気持ちも知らず考へている。

だからこそ、70's-80'sブームと同じくらい、棚田が眼前に広がる場所にも思いを馳せたい。とりわけ、ブルームから取り残され、夜の闇に沈み、ブームの輝きすら終わってしまって、もう雑草だらけになつた棚田がある田舎のような、取り残されてしまつた場所があることに。そして、いつか我々が住む都會が、あるいはVR内の人気ワールドが、そうやって終わりを迎えてしまうかもしれないことを考えたい。



L O S t i n J a P a n e s e s u m m e r



私は平成生まれだが、昭和時代の写真などを眺めると、何故か懐かしい気持ちになる。きっと、幼少の時分に



それこそ『ドラえもん』における「空地の土管に座って遊ぶ」というシチュエーションに憧れたこともある。都市開発が行き届いた平成時代を振り返れば、大人の目を窮屈に感じた生意気な少年だった私は、子供たちだけの空間を求めていたのかも知れない。

実際に、小学校近くの空地に置かれた建

築資材に座つて、友だちとお喋りしたこともあつたが……その空地の「地主」に叱り飛ばされ、追い出されたことがある。

今にして思えば、勝手に入られた拳句に資材を壊されたり、逆に怪我でもされたら賠償ものである以上、悪いのは明らかに侵入した私の方だったわけだが、当時は「空地に置いているなら、勝手に使われても文句ないだろ」と不平を言つたものだ。同時に、『ドラえもん』のような空地は、そして子供の居場所は現代にはないと悟り、「大人の身勝手さ」への反発心が強くなつた。



 resonite

写真／一鬼



そのような経験もあってか、昭和中期と後期特有の風景を見ると、どことなく懐かしさや哀愁、そしてある種の羨望を覚える。今回紹介する Resonite のワールド『Lost in Japanese summer』にも、そのような羨望を見出せるだろう。余談だが、本ワールドは2022年の2月頃に開催された、Metaverse Maker Competition 22と呼ばれるワールド作成コンテストに応募されたものである。

そこは河川敷のすぐ傍にある一画。スポーツ地点である車道の中央で佇むならば、感傷を呼び起こすような蝉の声に酩酊しそうになる。それは、コンクリートのビル群特有の蝕むような蒸し暑さというよりは、草葉に滴る露のように清涼で、柔らかな空気を連想させるだろう。

自動車が一切通らない——つまり車道の真ん中で大の字になつても許されるこの場所を、自由気ままに散策してみたい。すると——あつた、



あの空地が。ドラム缶、タイヤ、三

角コーン、それから土管。子供の頃には実現できなかつた小さな夢を、何にも囚われないメタバース空間で、ついに叶えることができる。土管に座り、友人と語らう夢を。



他には、ジャングルジムや鉄棒がある公園も出てくる。素朴な襖や畳がある、何の変哲もない平屋からは、なぜだか実家の匂いが香ってきそうだ。土手道や橋を歩めば、涼しい風が膝裏や脇下をくすぐるかのような心地になる。

殊更に「昭和レトロ」を感じさせるのは、菓子・玩具が売られている店舗だ。壁に張られたポスター、牛乳瓶が収められたガラスショーケース型の冷蔵庫などは、現代でも老舗旅館や年季の入った銭湯などに行けばたまに目ににする。私が現実世界で見てきたものと違うのは、ポスターが色褪せていないこと、冷蔵庫が錆び付いていないこと。当時の新鮮な記憶を永久保存したこの世界に、私の両親を連れてくればどのような反応を見せるのだろう?

飛行機の模型や紙風船、駄菓子もさることながら、おまけシールが封入されたチョコレートに目を惹かれる。現代でもこういった、おまけが本体と言われるお菓子は人気だが、脈々と受け継がれるこの伝統について語れば、当時の人たちとも親しくなれるのだろうか。





Lost in Japanese Summer

Created by Tanossy

ACCESS in Resonite

(文..sun)

ってしまうのだろうか？

メタバースという空地には、日々新たなワールドが生まれていく。発展途上の世界だからこそ、自由に遊びまわったり、空想に夢中になれる一面もある。やがて、空地がなくなってしまったら……？ 私は神妙な面持ちで満月を見上げていた。

土手階段に腰掛け、辺りを見回してふと思う。土手道の先や川の対岸には、まだ未開発の「空地」がどこまでも続いている。もしもこのワールドが、ビルで埋め尽くされ、自動車が行き交うようになって、周囲の目を気にするようになってしまったら、「昔は良かった」と私も言えだ。

ところで、自治会案内板にあるボタンを押すことで、このワールドは昼から夜に変貌する。蝉の鳴き声は、瞬く間に楽しき笛の音に変わり、案内板向かいの空地には屋台や櫓が現れる。





Real World



レトロな自販機がいっぱい！

オート

レストランを

知つてるか？

に民具などが保管されている。

ところが高度経済成長期が終了した後の時代では、「昭和」という名前／イメージとともに懐古される「手に取れ、触れられるもの」があまり思い浮かばないことに気づくだろう。実際、1970年代から1980年代にかけての生活用品を保存した資料館は、あまりない。特に1980年代以降は、物理的な生活用品ではなく当時のテレビCMやアニメなど、むしろメディアコンテンツの質感に対するものへとノスタルジーの対象が変化している。2010年代以降、エイバー・ウェイヴやシティップ・リバイバル、Y2Kなどの形で表出している新しいノスタルジーは、この「生活用品からメディアコンテンツへ」という対象の変化が現れており、今後もこの傾向は続くだろう。

昭和レトロという（いかにも私向きの）テーマをいたいたものの、このテーマに沿う場所を現実世界で探そうとすると少々困ったことが起こる。通常、昭和レトロな場所といえば、昭和三十年代の高度経成長期がメインだろう。私が行ったことのある場所だけでも、青梅の昭和レトロ商品博物館、湯布院の昭和館、久慈の昭和の想い出博物館などがある。これらの場所では、昭和三十年代の珊瑚看板や三種の神器の古い家電、ブリキのおもちゃなど、当時の生活用品が飾られている。時を遡って昭和二十年代以前のレトロな物品は、各地の公営の郷土資料館

に保管されている。

ところが高度経済成長期が終了した後の時代では、「昭和」という名前／イメージとともに懐古される「手に取れ、触れられるもの」があまり思い浮かばないことに気づくだろう。実際、1970年代から1980年代にかけての生活用品を保存した資料館は、あまりない。特に1980年代以降は、物理的な生活用品ではなく当時のテレビCMやアニメなど、むしろメディアコンテンツの質感に対するものへとノスタルジーの対象が変化している。2010年代以降、エイバー・ウェイヴやシティップ・リバイバル、Y2Kなどの形で表出している新しいノスタルジーは、この「生活用品からメディアコンテンツへ」という対象の変化が現れており、今後もこの傾向は続くだろう。

昭和レトロかつ1970～1980年代を対象としたリアルワールドの場所を選定すると、選定先が少なくなってくるのはこのためである。

その上で対象を探すと、典型的な「昭和」イメージの対象である昭和三十年代とその消失点たる1980年代の狭間、

つまりは生活用品へのノスタルジーからコンテンツの質感へのノスタルジーへと移行する最中の1970年代に、一つ面白い場所がある。オートレストラン、オートスナック、コインレストランなどと呼ばれる自動販売機コーナーである。

オートレストランは、街道沿いを中心とし、長距離トラックのドライバーを対象として、深夜でも食事することが可能な（基本的に）無人施設だ。天ぷらそばやうどん、ハンバーガー、トーストなどの自動的に調理する自動販売機が設置されており、いつでも温かい食事をすることができる。また、1978年にスペースインベーダーが社会現象となつた後は、オートレストランと郊外型ゲームセンターを併設した施設も登場した。埼玉県のオートパーラー上尾や、行田の鉄剣タローなどがそのパターンだ。

ただ、コンビニの24時間営業が標準となつた1990年代以降、コンビニの持つ「深夜でも温かい食事ができる」という特徴は、オートレストランのそれと重複するようになった。コンビニの利便性が高まるのと反対に、オートレストランは店舗を減らしていった。

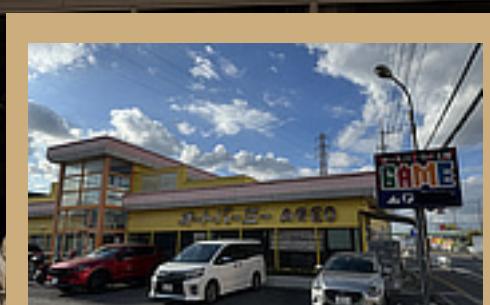
先ほど触れた鉄剣タローは2020年5月末に惜しまれながら閉店したものの、岡田磨里監督のアニメ映画『アリスとテレスのまぼろし工場』(2023年)にも「オートレストランみふせ」という名前で登場するなど、閉店後も人気を博している。

2010年代後半から、魚谷祐介の『日本懐かし自販機大全』などを通じて、自動販売機やオートレストランに対するノスタルジーが人気となってきた。私もオートレストランを訪れるようになつたのもその頃からだが、年々、天ぷらそばを食べる前に撮影する人を見かけることが増えており、レトロな場所としての人気が高まり続けているのを肌で実感している。

の社長の趣味でオートレストランの自動販売機が90台ほど置かれており、オートレストラン趣味の人間にとつての聖地となっている。例えばノスタルジーの対象となりやすい銭湯や純喫茶、町中華などは、ケロリン桶やベロア生地の椅子などを取り出してみても、その施設を再現できるわけではない。生活用品はそれを使うために、博物館や資料館が役割を果たしてきたわけである。

私がオートレストランを好むのは、自動販売機が置いてあればどこでもオートレストランに「なる」ことだ。中古タイヤ市場 相模原店は名前の通りタイヤやアルミホイールの専門店なのだが、同社

できあがるまで なんと27秒!



オートパーラー上尾

【住所】

埼玉県上尾市久保 70-2



↑自販機コーナーはゲームセンターの隅っこに併設。遊びのついでに食べに来る人もいる。



↑オートパーラー上尾ではうどんとそばやトーストなど、大変貴重でレトロな自販機がある。



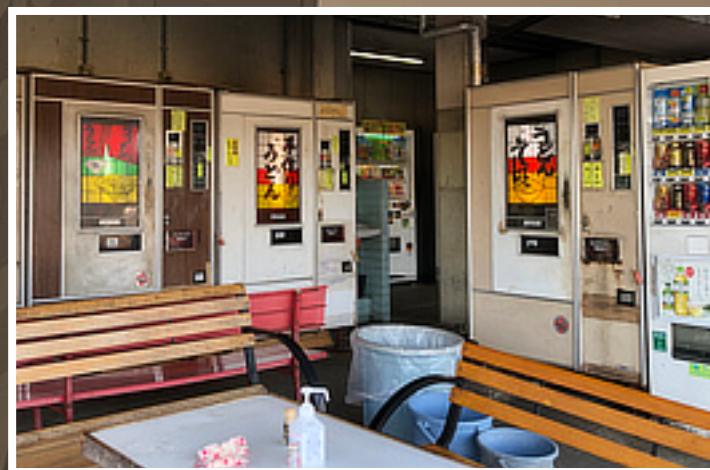
↑ゲームセンターが主体で、レトロなアーケードゲームからオンライン麻雀ゲームなど遊べる。

コンビニが全国拡大する前に活躍をみせたのが「オートレストラン」。うどんやそば、トーストなどが買える自販機があり、その場で食べられる年中無休の無人の施設である。長距離ドライブの休憩

時に多くの人が利用した。埼玉で人気のある「オートパーラー上尾」で出されているそばやうどん、トーストはお店の手作り。朝から夕方、時には夜間まで欠かさず補充している。

埼玉

埼玉で人気のオートレストラン
オートパーラー上尾



↑レトロ自販機の中でレアなうどん自販機がなんと同時に3台稼働している、珍しい場所として知られる。



後藤商店

【住所】
島根県益田市安富町 1905-3

島根県の西部、石見地方の中で有名な場所といえば、「後藤商店」の自販機コーナー。天ぷらうどんや肉そば、ラーメンなどラインナップがあり、その中「スタミナうどん」が名物だ。自販機なのにトッピングが豊富な量が特徴。ドライブのひと休みにおすすめ。



島根

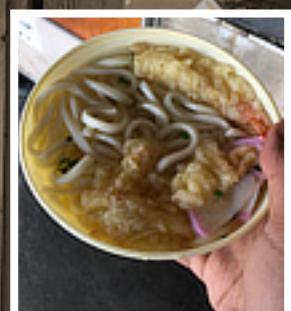
名物スタミナうどん 後藤商店



↑「ラーメン」「うどん」のぼり旗が一際目立つのが特徴。なんともレトロな出立ちするうどん＆ラーメン自販機はしっかり健在だ。



島根 自販機コーナー オアシス



↑この安さで具材はしっかりとしている。

島根県益田市に向かうと車が沢山停まっていて一際ざわついている自販機スポットがある。この自販機はラーメンと鶏天うどんなど、レパルトリーも豊富だ。価格はリーズナブル。他にも肉巻きおにぎりやお菓子、パンの自販機もある。



自販機コーナーオアシス

【住所】
島根県益田市安富町 2597-1

これは1980年以降の質感へのノスタルジーにも見られない特徴である。PCでウェイバーウェイブを流しても、その空間が1980年に「なる」わけではもちろんなく、隔たった時代の空気を（おそらくは些かなりとも現在への抵抗感とともに）纏うに留まるだろう。言うなれば、オートレストランの自動販売機はゲームセンターのゲーム筐体のように、ノスタルジーの対象がモジュール化されているのである。

この点は、オートレストランの施設の外装が違っていても、等しくオートレストランとして成り立つ特性にも繋がっている。島根県にはオートレストランが多く、西の聖地とでも呼ぶべき場所だが、特に益田市の後藤商店は面白い。石見地方で生産される赤褐色の石州瓦の屋根が特徴的な施設で、おそらく元々は普通の商店だったと思われる。それでも店内に自動販売機が置かれているだけで、オートレストランに「変化する」点が興味深い。

オートレストランは、ノスタルジーの対象を何気ない今この空間に現に生じさせる。普段の生活とは隔たった博物館・えあればオートレストランのノスタルジーは現在でも作ることができる。純喫茶にせよ、銭湯にせよ、現在はレトロ趣味の代表格とも言える施設は、経営者の高齢化によりいつの間にか閉店してしまうことが多々ある。オールドスタイルの純喫茶を新たに開店したとしても、やはりそこには「本物」のレトロではないという感想を抱きがちだ。

オートレストランの自動販売機は、1970年代のタイムカプセルだ。硬貨を入れて天ぷらそばのボタンを押し、ニキシー管のカウンターがゼロになつたら、25秒で1970年代にタイムスリップすることができる。特に島根県のオートレストランは、後藤商店の石州瓦との相性が素晴らしい。出雲観光と併せて、石見地方のオートレストランを回ることをオススメしたい。

Gravure : Japan After School

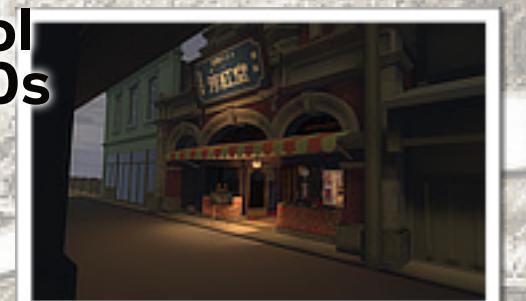
撮影: neirow

VR CHAT

哲学カフェ 芳紅堂

Japan After School
billls kitchen 1950s

執筆: ヤマノケ
撮影: neirow



cluster

さよならの向こう側

執筆&撮影
: ヤマノケ



Lost in Japanese summer

執筆: sun
撮影: 一兎



オートパーラー上尾 自販機オーナーオアシス 後藤商店

執筆&撮影: わく

感想などは
#Platform通信欄 へぜひお寄せください！

Vol.11

Platform あとがき



ニッソちゃん
編集長

思い出したい過去、忘れない過去、あったかも
しれない未来。それらを飲み込んで列車は走ります。
次のテーマは「車・車両」。お手持ちの
切符を無くさないように。

思惟かね
編集/デザイン

見た目はレトロだけど中身は最新、みたいなのが好きです。古いからレトロなのではなく、時
を超えた「異世界感」が好きなんでしょうね。

SUN
ライター

本雑誌で扱っているVRSNS以外にも、最近はMy
Vketなどの別のプラットフォームに行って、エッセイなどを綴っています。新天地を冒險して、それを日誌のように書き残す。なんて幸せな日々。

燕谷古雅
編集/デザイン

電腦荒廃の編集がひと段落したと思いきや、
Webページのデザインも作らないといけなかつたから、紙面編集と並行してやったぜ。

わく
ライター

最近、虎ノ門のヘックルンというプリンが有名な純喫茶に行ったら、TikTok経由でバズっていたらしく、お客様の八割は海外の方でした。昭和レトロの人気が国内に留まらなくなつたのを、肌で感じます。

ヤマノケ
ライター

VRChatに初めて入ったのは2020年頃だけど、それ以前に作られたworldへ赴くと得も言えない
野暮ったさや懐かしさを感じる。VR上にも“レトロ”があるのかもしれない。

Tokikaze
カメラマン

古い物の匂いって何故か脳みそに染みますよね。
五感の中でも嗅覚はとても記憶と結ばれやすい感
覚らしいです。写真から懐かしい匂いを感じたあなたはもうノスタルジックシンドロームです。

neirow
カメラマン

クリームソーダとメロンソーダをよく間違え
ますが、生きるのに困っていないのであります。
ままの自分で生きていこうと思います。

一兎
カメラマン

つよつよユーザーに沢山教わりながら
撮りました！

Nag
校正

校正中になぜか、『リズ青』のある台詞「私にとっては
ずっと今」を思い出していました。所謂「レトロ」とは
真逆で幾重にもすれ違う台詞なのは明らかですが、それ
違い方が似ているかもとか。

STAFF | 编集長 | Editor Chief

ニッソちゃん

誌面デザイン | Design

思惟かね

燕谷古雅

校正 | Proofreading

Nag

執筆 | Writer

ヤマノケ

ニッソちゃん

sun

わく

撮影 | Photographer

neirow

Tokikaze

一兎

わく

Platform Vol.11

【レトロスペクティブ昭和】

発行: Platform編集部 (platformvirtualreal@gmail.com)

初版 (2024/7/1)

< To the next JOURNEY.

2024. 7. 1

Our
journey
Continues...



Platform

Vol. 11

レトロスペクティブ
昭和